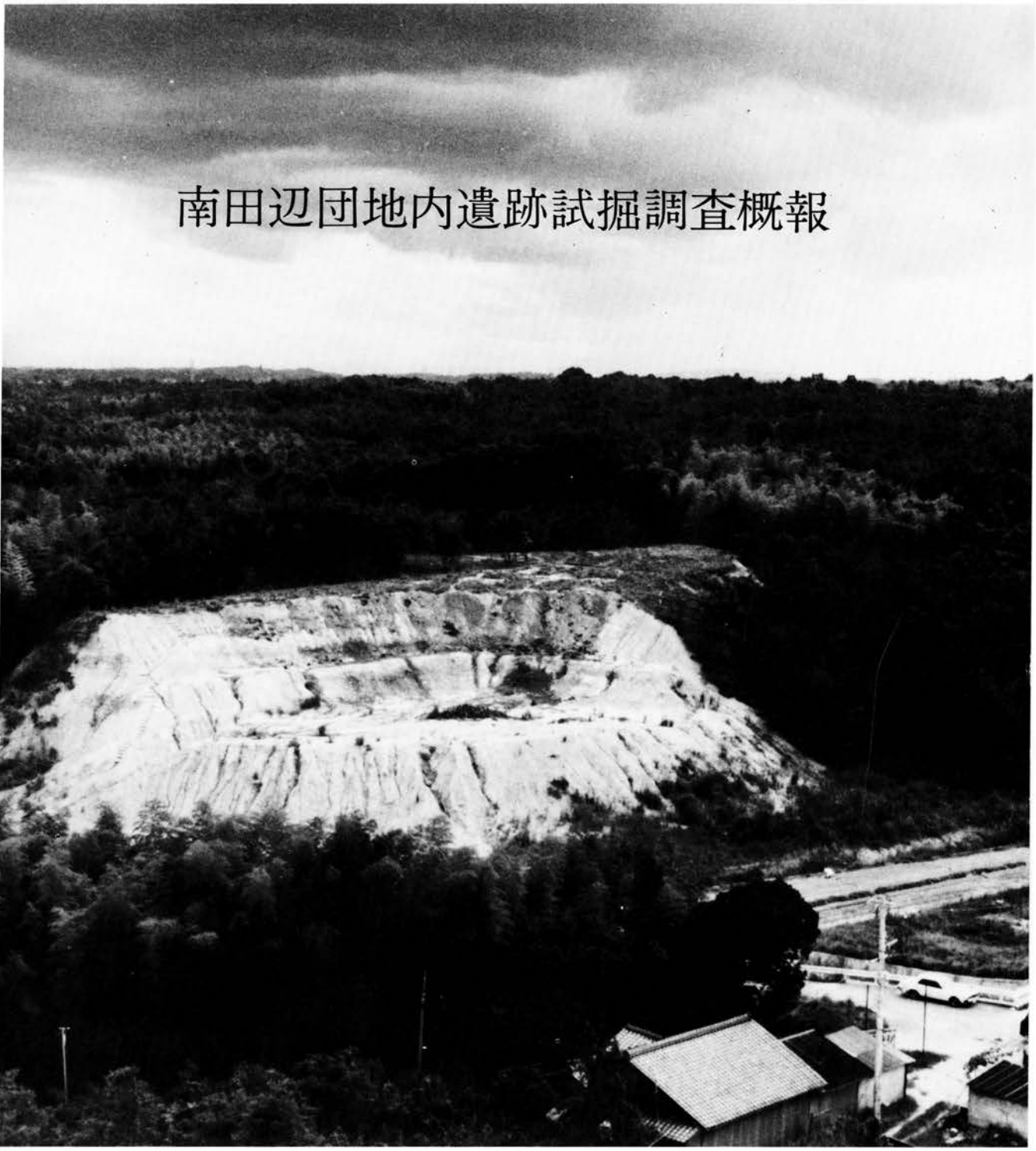
田辺町埋蔵文化財調査報告書　第４集

南田辺団地内遺跡試掘調査概報



1982

田辺町教育委員会

序

田辺町南部では，木津川へ向かって普賢寺川が東流しています。この普賢寺川を挟んで戦国時代には，館や城がたくさん存在したことが，大御堂観音寺所蔵の古図等でうかがうことができます。

今回試掘調査を実施したところは，普賢寺川を挟み同志社大学田辺校地の南側の丘陵地であります。ここは，普賢寺谷の入口に位置していることや，昭和55年度に実施した分布調査で丘陵頂部から中世遺物を採集したことなどにより，中世の城館跡ではないかという前提のもとに調査を実施しました。

この普賢寺谷における城館跡の発掘調査例は，今まで同志社大学田辺校地内の発掘調査を除いてありません。それ故に本試掘調査は，中世の城館跡いや中世における普賢寺谷の意義を解明する１つの鍵となることを確信しております。また昨年実施した分布調査の結果も合わせてここに報告します。

試掘調査の実施にあたり，京都府文化財保護課安藤信策技師ならびに関係諸氏・諸機関のご協力を得，調査が速やかに終了したことを心から感謝いたします。

昭和57年３月20日

田辺町教育委員会

教育長　籔　下　撤　一

目　　次

1. は　じ　め　に……1
2. 位 置 と 環 境……2
3. No.1 地点(口駒ケ谷遺跡)の調査……5
4. No.2 地点の調査……12
5. No.10・11・12地点の調査……12
6. No.3・4，5，14地点の調査……12
7. ま　と　め……14

凡　　例

1. 本書は，昭和56年度に田辺町教育委員会が実施した南田辺団地内遺跡試掘調査の概要報告である。
2. 現地調査は，昭和56年7月6日に開始し，昭和56年9月30日に終了した。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

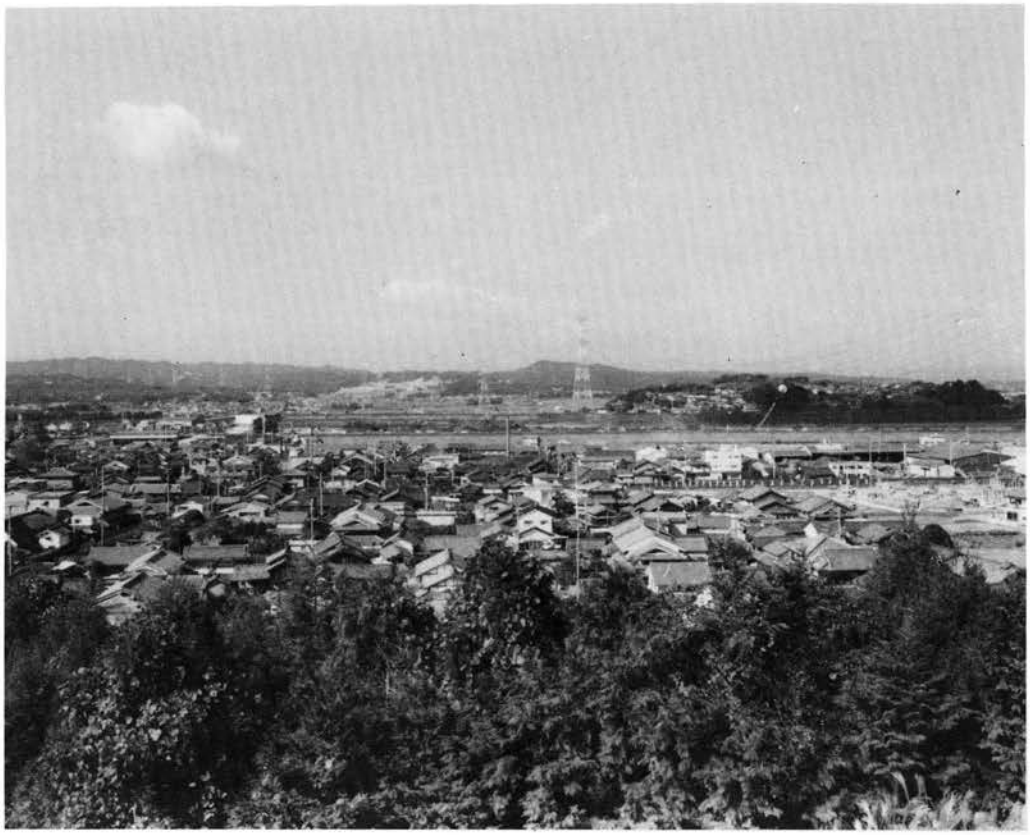
調 査 主 体	田辺町教育委員会教育長	籔下　撤一
調査担当者	京都府教育庁指導部文化財保護課技師	安藤　信策
	田辺町教育委員会社会教育課社会教育主事	西川　英弘
調査補佐員	龍谷大学卒業生	鷹野一太郎
調査事務局	田辺町教育委員会社会教育課（課長　博田武則）	

4. 調査に際しては，鈴木重治(同志社大学)，村井　博(田辺町文化財保護委員長)，水山春男(南山西文化クラブ)の各氏から有益な指導・助言を得た。
5. 本書は鷹野が執筆し，編集は西川・鷹野両名が行った。

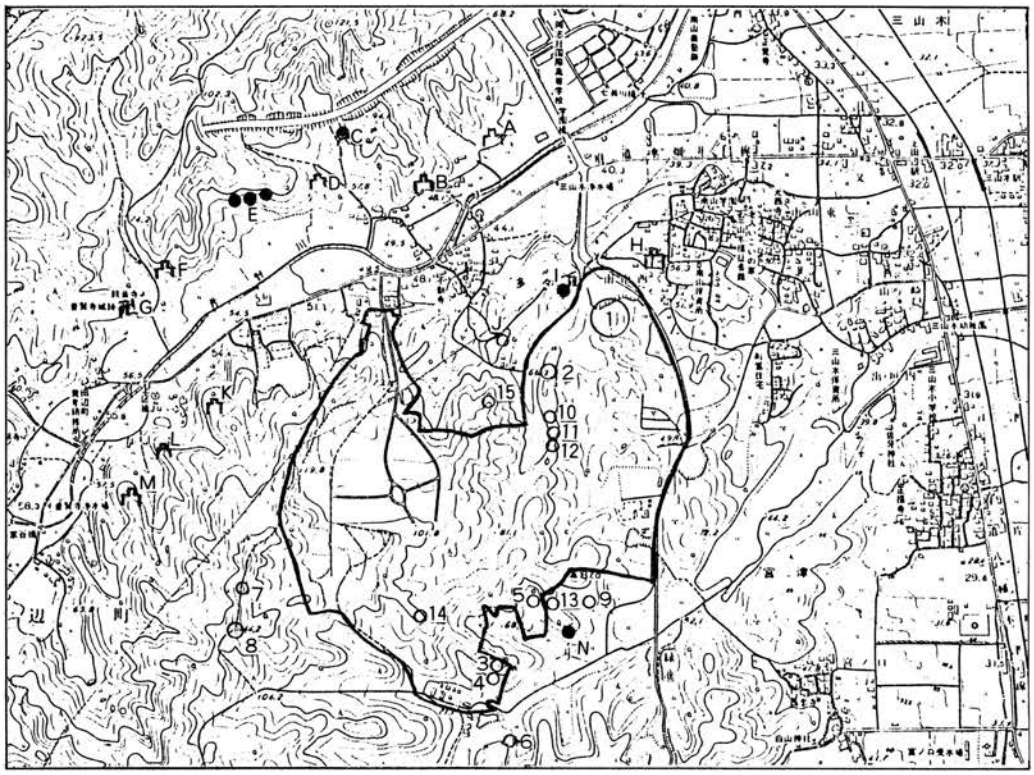
1. はじめに

昭和55年８月，住友商事株式会社・日本生命保険相互会社・近鉄不動産の三社から，田辺町大字三山木小字口駒ケ谷ほかの宅地開発(南田辺団地)について，当町教育委員会に遺跡の存在の有無の確認依頼があった。当該地は，これまで遺跡の空白地帯であり，分布調査の必要があった。そこで，昭和56年２・３月に三社の委託を受け，遺跡分布調査を実施した。その結果，散布地・古墳らしきマウンド等15ケ所を確認(表 1.参照)し，昭和56年４月にその旨報告した。昭和56年５月開発地内のみ９ケ所を試掘調査することで，住友商事・日本生命の二社と町教委とで契約し，昭和56年７月６日から，遺跡の規模及び性格等を確認するため，調査に着手し，同年９月30日に現地作業を終えた。

なお，住友商事・日本生命をはじめ，猛暑の中現地作業に従事された諸氏その他多くの方々の協力によって，今回の調査が行われたことをここに記して感謝の気持ちとしたい。



井手町より普賢寺谷方面を望む



A.都谷遺跡　B.新宗谷館跡群　C.まむし谷窯跡　D.館　跡　E.下司古墳群　F.館　跡　G.普賢寺跡
H.南山城跡　I.口駒ケ谷古墳　J.多々羅遺跡　K.館城跡　L.館城跡　M.小田垣内遺跡　N.菖蒲谷古墳
（アラビア数字は右ページ表参照）

調査地周辺地形図(1/20,000)

2. 位置と環境

田辺町は，南山城平野の中央部，木津川左岸に位置し，西部は南北に縦走する京阪奈丘陵から派生する丘陵地であり，東部は北流する木津川によって形成された沖積平野が広がる，南北に長い町である。今回調査の南田辺団地開発予定地は，田辺町大字三山木小字口駒ケ谷ほかで，田辺町南部の丘陵地であり，同志社校地のある丘陵とは普賢寺川を挟んだ南側にあたる。

では，歴史的環境をみることにしよう。田辺町内で最古の人間の足跡として，天王で採集されたサヌカイト製石核を上げることができる。これは旧石器時代に属するもので，今から1万年以上前のものである。次の縄文時代のものとしては，古くから有名な三山木の山崎神社の石棒がある。弥生時代になると，前代に比べて資料の増加がみられる。弥生前期については不明であるが，京都府立山城園芸研究所内の発掘調査によって，中期に属する溝と土器がみつかっている。また三山木の田辺天神山遺跡では後期の竪穴住居跡群等がみつかっており，現在でも現地で観察できるよう保存されている。この遺跡は所謂高地性集落と呼ばれるものの南山城での代表例として知

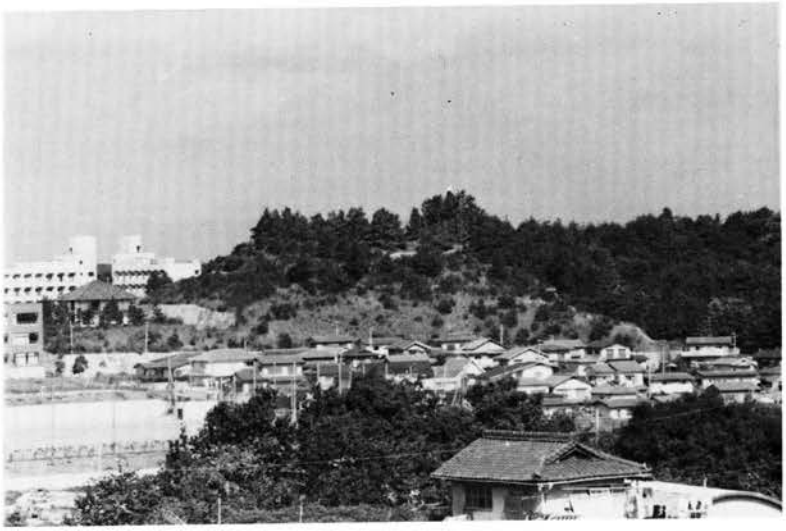
表 1. 南田辺団地内遺跡分布調査表

地点番号	遺跡の種類	立 地	概　　要	備 考
No. 1	散 布 地	丘陵頂	丘陵頂部平担面に営まれた中世館跡か。遺跡の北東部は，過去の造成により削り取られた急なガケとなっており，そのガケ面から多量の土師器・陶器片を採集。	
No. 2	散 布 地	丘陵稜	標高80m前後の丘陵稜線上付近から土師器片を採集。	
No. 3	古 墳 か	丘陵稜	径12m，高さ1.7mのマウンド。	
No. 4	古 墳 か	丘陵稜	径8m，高さ1.7mのマウンド。	
No. 5	古 墳 か	丘陵稜	径12m，高さ1.3mのマウンド。	
No. 6	散 布 地	丘陵腹	土師器片採集。奥山田池遺跡。	用地外
No. 7	城　　跡	丘陵稜	標高140m前後の稜上。厚さ20cm程の遺物包含層及び礎石かと思われる石材2個確認。1個は原位置を保つ。	用地外
No. 8	城　　跡	丘陵頂	この付近での最高点(標高149m)に位置し，眺望は絶景である。約5m×10mの平担面があり，その周囲は急なガケとなる。瓦・土師器片採集。	用地外
No. 9	散 布 地	丘　麓	土師器採集。	用地外
No. 10	古 墳 か	丘陵稜	径10m，高さ1.5mのマウンド。	
No. 11	古 墳 か	丘陵稜	径10m，高さ1mのマウンド。	
No. 12	古 墳 か	丘陵稜	径7m，高さ1mのマウンド。	
No. 13	古 墳 か	丘陵稜	径11m，高さ1mのマウンド。	用地境界
No. 14	古 墳 か	丘陵稜	径11m，高さ1mのマウンド。	
No. 15	新宮社跡	丘陵稜	現在，多々羅区北部にある新宮社の旧跡。	用地外

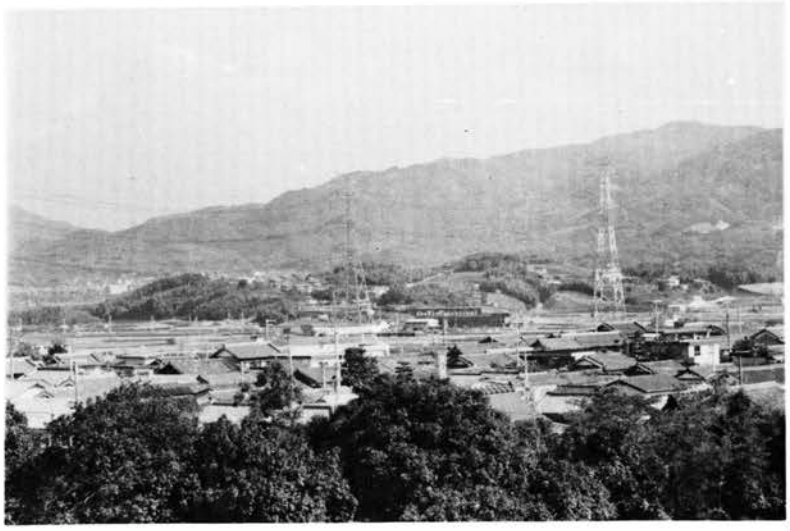
られている。同じ頃の竪穴住居跡が飯岡丘陵の上でもみつかっている。さらに，中央公民館裏山の調査で，後期に属する墳墓――方形台状墓と呼ばれるもの――(興戸5号墳)がみつかり保存されている。畿内地域でも例の少ないものとして注目されよう。これらの他，西部の丘陵東斜面からいくつか資料が採集されている。

次の古墳時代になると，西部の丘陵上や低台地，飯岡丘陵などに点々と古墳が造られる。飯岡では，前方後円墳車塚，大円墳ゴロゴロ山などで構成される飯岡古墳群が著名であるが，近年これら前期・中期の古墳や飯岡横穴に，後期の東原古墳が加わったことは，古墳群内の動向を考える上で重要である。また，大住にある前方後円墳南塚・史跡前方後方墳車塚(チコンジ山)や，先の方形台状墓や小規模な前方後円墳を含む興戸古墳群などは有数の前期・中期の古墳であり，種々の問題点を私達に与えてくれる。

後期になると「千塚」とか「百穴」と呼ばれるような大群集墳はなく，単独の石室古墳や数基から十数基の小規模な群集墳が出現するようになる。薪の西山古墳群・堀切古墳群などがあげられる。普賢寺谷についてみても，下司古墳群・王居谷古墳群の古墳群や御家古墳・錆古墳等がある。また，薪から大住・松井には，多くの横穴群が存在し，堀切6号横穴からは凝灰岩製の家形石棺が



田辺天神山遺跡(No.1より)



飯岡丘陵(No.1より)

出土しており，現在中央公民館で展示されている。

奈良時代になると，興戸廃寺・三山木廃寺・普賢寺などの寺院が瓦葺の建物として登場する。普賢寺の大御堂には，天平期の十一面観音が伝わり，国宝に指定されている。また,『続日本紀』にみえる山本駅は，三山木字山本の集落付近と考えられている。なお，松井で，奈良時代末頃の須恵器窯跡がみつかり調査が行われている。古代末から中世・近世については資料的に乏しいが，古くに三山木出土の中国製青磁や同志社校地内における都谷中世館跡の調査，さらに今回新たにみつかった口駒ケ谷遺跡などわずかずつではあるが増加してきており，古屋敷遺跡等の調査では，条里制に関係する畦畔遺構がみつかっている。

このように，遠い昔から私達の祖先が大自然と闘いながら生活を営み続け，その跡を町内の各

所にみることができる。

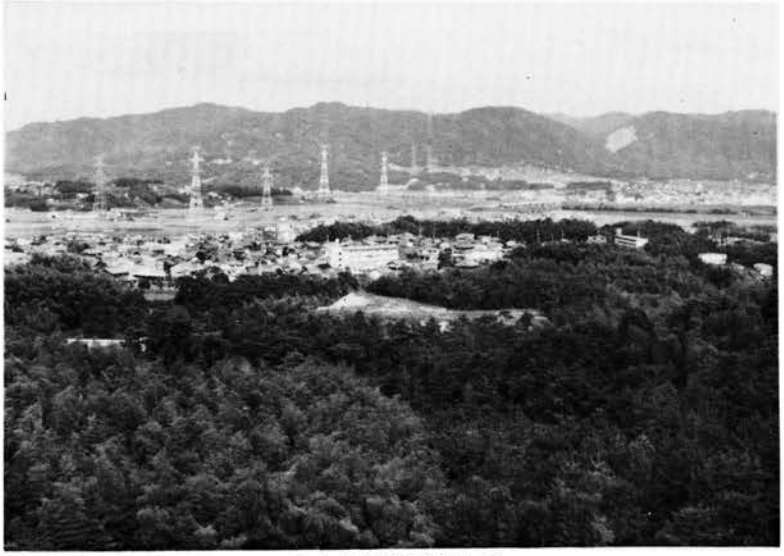
3. No.1 地点(口駒ケ谷遺跡)の調査

田辺町大字三山木小字口駒ケ谷に所在し，開発予定地の北東端の丘陵頂部平担面に立地する。北に都谷中世館跡のある，現在同志社校地となっている丘陵を，東に南山地区の丘陵，飯岡丘陵さらに井手の山々，西に普賢寺・天王の山々を望む見はらしのよいところである。遺跡のある平担面の北東部は，過去の造成で大きく削り取られ急なガケになっていて，そのガケ面から多くの土器片が採集された。現存する平担部のみの規模は，最大で東西105m・南北55mを測ることができる。調査前は雑木の林であり，以前は茶畑として利用されていたという。

調査は先ず，樹木の伐採作業から行った。その後，地形にあわせ60m角を大地区とする3m方眼の地区割りをし，地形図作成のため，平担部の測量を始めた。測量後，地区割りに従って2m×6mのトレンチを基本として，掘り始めた。溝等が検出され，その延長部等確認のためのトレンチの拡張，現表でみられる段差の確認等，最終的に17ケ所，約250㎡について調査を行った。層位は表土層の下に黄色粘質土層がほぼ平担面全域にみられ，その下が遺構面と考えた黄褐色系の粘質土層である。遺構はこの粘質土層を切り込んだ状態で検出された。遺構面の標高は，東端のK−1トレンチで70.60m，西端のL−1トレンチで72.80mをそれぞれ測る。

検出された遺構には，堀と考えられる溝2本，土壙，ピット，段差等がある。以下各々について簡単に説明する。

溝SD01 G−1・I−2・K−4トレンチで検出された南北溝。幅約6m，深さは南のK−4で1.2m，北のG−1で1.6mを測る。溝底近くから土師器小皿・瓦器椀が，埋土上層から瓦器の火舎が出土している。



No.1 地点遠景(西から)

I－2トレンチ作業風景

K－4トレンチ作業風景

溝SD02 4－3・4，8－1・2トレンチで検出された東西溝。幅4.5～4.8 m，深さ1.2～1.4 mを測る。

土壙SK03 K−1トレンチで検出された，径4 m，深さ40cmの円形になると考えられる土壙の南半分。埋土内から近世以降の瓦・土師器・陶器・染付等が出土している。

段　差 I−1・4−3・8−1・K−5トレンチでそれぞれ検出。比高差40cm程で，平担面の外側に向けて低くなっている。

出土遺物 溝SD01・土壙SK03・東部の黄色粘質土より，土師器・須恵器・瓦器・陶器・染付・青磁・金属製品等が出土しているが量的には乏しい。

土師器には，甕・羽釜・皿がある。

No.1 地点(口駒ケ谷遺跡)発掘調査図

I－2 トレンチ(西から)

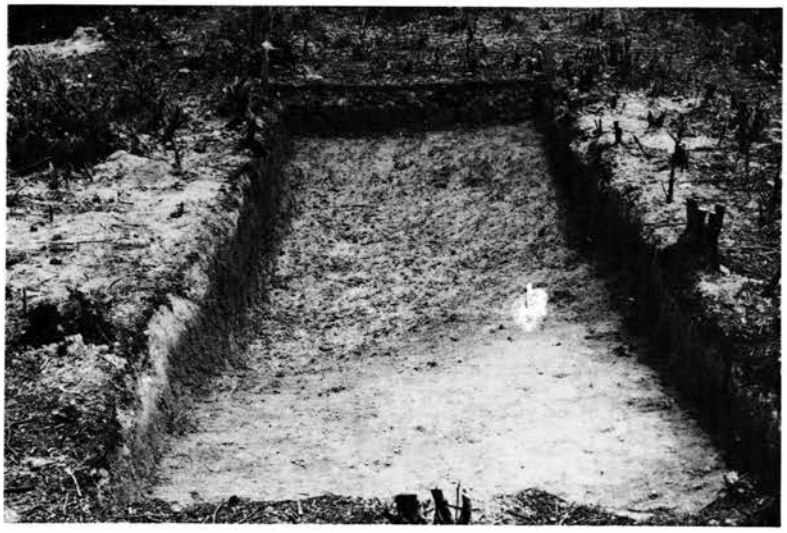
8－1,2 トレンチ(南から)

瓦器には，椀・火舎がある。

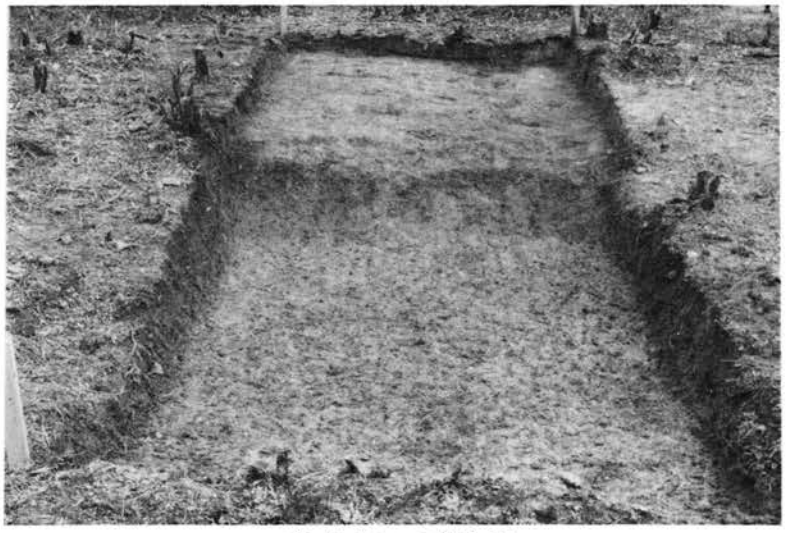
青磁は，中国の龍泉窯系椀で内面見込みの部分に菊花が陰刻されている。

成　果　No.1 地点は調査の結果，城跡ないし館跡であると推定されよう。そこで小字名をとって口駒ケ谷遺跡と一応命名することにした。この遺跡の時期は，出土遺物からみて，14～15世紀に中心をおくと考えられるが，くわしくは次回の本調査によって明らかにされよう。

構造は，二方以上を大きな堀で囲まれた中に建物等の存在が考えられる。しかし，建物群や門・柵等の施設に関しては未確認で，現地形をみてもよくわからない。また，堀で囲まれると考えられる部分は，平担面の西半分であり，遺物の多くはガケ面を含めた東半分から出土していることも考えると，東部にも建物等なんらかの遺構の存在が推定される。さらに，東部の南側には 1 m



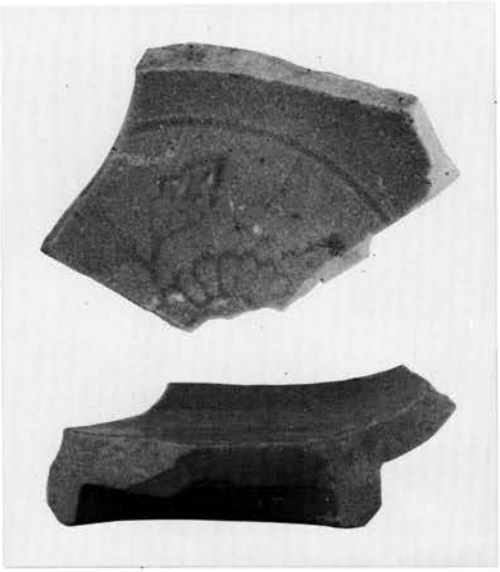
K－1トレンチ(西から)



K－5トレンチ(西から)

以上の人為的と考えられる段差があり，そこの様子も明らかでない。

遺物は，量的に乏しいが，中国製の青磁が出土していることは，流通面等から注目される。また，数点出土した須恵器片は中世以前のものであり，中世以前の遺構の存在する可能性もある。



No.1 地点出土青磁椀

No.1 地点出土遺物(上:土師器, 下:瓦器)

No.1 地　点(北から)

4. No. 2 地点の調査

No. 2 地　点(調査後)

開発予定地北部の丘陵稜にあり，分布調査の際土師器小片が採集された。3 m方眼の地区割り後，傾斜面に 2 m × 9 mのトレンチを東西・南北各々 1 本入れて調査を行った。表土下 1 m程下げても，遺構・遺物包含層は検出されなかった。

分布調査で採集された土師器については，他の地から運ばれたものかとも考えられるが不明であり，また立地をみてもわずかな傾斜面があるのみで，他はガケ・稜線となっていて，遺跡地であるとは考えにくい。

5. No.10・11・12地点の調査

開発予定地内北部，No. 2 地点の南約 150 mの丘陵稜線上に小規模なマウンドがあり，北から10・11・12とした。地区割り後各々頂部に 2 m幅のトレンチを入れ調査を行ったが，表土直下で砂層にあたり，50～80cm程下げても砂層のままで，遺物等の検出はなかった。

6. No. 3・4，5，14地点の調査

No. 3・4 地点　開発予定地内南端部の南東行する丘陵から張り出す小支丘の上に 2 つのマウンドがある。北から 3・4 とした。地区割り後，頂部に 1.2 m × 6 mのトレンチを各々 1 本入れて調査を行った。No. 3 では表土直下で砂層にあたり，No. 4 では表土直下で粘土層にあたった。共に70cm程下げたが変化なく，No. 4 では粘土層の下に砂層が表れた。遺物等の検出はなかった。

№5地点　開発予定地内南部の南東行する丘陵から出る小支丘の頂部にある。丘陵端には石室墳である菖蒲谷古墳が存在し，両者の間は直線で約100ｍ離れている。地区割り後，頂部に1.2ｍ幅のトレンチを直交するよう２本入れて調査を行った。表土直下で堅い粘土にあたり，60cm程下げたところ砂層に変化した。遺物等の検出はなかった。

№14地点　開発予定地内南部の丘陵上にある。地区割り後，頂部に1.5ｍ×3.5ｍのトレンチを２本入れ調査を行った。表土直下で砂層にあたり，最深80cmでも砂層のままで遺物等の検出はなかった。

№3（手前）・４地点（調査前）

№5地　点（調査後）

No.14地　点(調査後)

7. ま　と　め

これまで述べてきたことをここで簡単にまとめておきたい。

No. 1 地点については，中世の城跡もしくは館跡であることがわかり，口駒ケ谷遺跡と名付けた。来年度に予定されている本調査によって，具体的な内容が明確にされよう。

No. 2 地点については，調査のかぎり遺構・遺物等の検出はなくそれらの存在する可能性も低いものと考えられる。

その他の地点，No.10・11・12，No. 3・4，No. 5，No.14地点については，当初古墳と考えられたが，いずれも遺構・遺物等の検出はなく，古墳とは認められず，自然地形であることが判明した。今回の調査地を含め，木津川左岸一帯の丘陵地は，礫・砂・粘土で構成される"大阪層群"によって作られている。これは，今から200万年～50万年前という長い年月にわたり，堆積・隆起のくり返しによってなされたものである。この地層が，植物活動・風化などにより侵食され，やわらかい部分が流れ，しまった部分だけが，一見古墳のような高まりとなって残ったものといえる。

昭和 57 年 3 月 30 日　印刷
昭和 57 年 3 月 31 日　発行

南田辺団地内遺跡試掘調査概報
（田辺町埋蔵文化財調査報告書第 4 集）

編集・発行　田辺町教育委員会
〒610−03　京都府綴喜郡田辺町
大字田辺小字丸山 214 番地
電話　07746−2−2552

制　　作　ビクトリー社
〒604　京都市中京区油小路錦上る
電話　075−221−1420